ああ我が青春に悔いあり

瀧沢鈴子（松が丘・62歳）

昭和十六年十二月八日の朝、東京の女学生（現高校生）だった私は、登校すると同時に友達から米英両国と戦闘状態に入ったことを聞かされた。早く家を出た為ラジオのニュースを聞かなかったのだ。全生徒を前に校長先生から

「貴女方も心を一つにしてお国の為に尽くすように。」と、お話があった。十三才の私でもこれは大変なことになった。大国である米英が相手ではとても勝ち目は無い。小さな日本がどんなに頑張ろうと負ける日が来ることは必至である。私たちはどうなるのだろう。という不安が頭の中をよぎって行く。でも軍国主義華やかだった時代にそのような言葉は絶対に言えなかった。

最初は確かに日本軍の勝利が伝えられ、提灯行列で万歳、万歳とお祝いし、出征兵士を送る家族は涙も見せず誇らしげだった。（心の中はさぞ悲しかったと思われる。）

ところが次第に戦況はあやしくなって行った。それでも国民には事実をかくし、ラジオや新聞で敵の軍艦や飛行機にあたえた損害は大きく、我が軍の損害は少なく報道された。半信半疑ながら信じざるを得ない国民は、ひたすら勝利を願って耐えがたきを耐えた。

男性は若い人だけでなく中年の人まで戦地に送られ、銃後は老人と女、子どもによって守られた。輸入など出来ない状態で、次第に物資が無くなり、家庭や公園等の金属は供出、日用品や衣料は勿論、食糧まで配給、終戦近くにはその配給も滞るようになってしまったのである。

昭和十九年四月、女学校の四年生になった私達に下った命令は、学徒動員で報国隊になり、東京重機で小銃を作ることだった。ペンを持った手は冷たい油にまみれてしまったのである。無論勉強するどころでは無い。全員国防色の作業衣、靴もなく、手造りの花緒をすげた下駄を履いて通う。

先ず適性検査を受けて、それぞれの部門にまわされる。私は始め部品の検査だったが、人手不足になったらしく学徒班を編成、一種類の部品の製造をまかされる。火の気一つない工場で震えながら働く。体をこわして亡くなった友、疲労のため手が動かなくなった友もいる。そんな中で唯一の楽しみは、駅まで二列に並んで帰る道すがら皆で歌うことだった。軍歌が多い中で、私達は「希望のさゝやき」が好きだった。

時々敵機の空襲が始まったのもその頃で、帰りに電車が不通になって線路の上を歩き、鉄橋の上を恐る恐る渡ったのもいやな思い出の一つである。

昭和二十年三月の東京大空襲では下町がやられ多くの犠牲者を出す。その頃から時々、今高層ビルが建つ西新宿にあった私の家の近所へもB29が来て焼夷弾を落として行った。

始めは焼夷弾の数が少なかったので、日頃の訓練の力を発揮、近所の人達が協力して消し止めていた。然し燈火管制（家から光がもれないよう電燈に黒い布をかぶせた）の効果は皆無、警戒警報のサイレンで起こされ、防空壕に避難する晩が続くようになって来た。

一生忘れることの出来ない五月二十五日、ラジオは、「東部軍管区情報。敵数目標南方海上より本土に接近しつつあり。」と報じたが数目標どころか沢山のB29が山の手に押し寄せ、西新宿は炎に包まれてしまったのである。

以前からその日の為に防空壕を二個庭に掘っておいたので、一個には佛様やふとん、その他大切なものを投げ込んで土をかけ、もう一個の方に家族で避難した。警防団の副団長をしていた父は、外で近所の人達の指揮をとっていたがいよいよ駄目と判断したらしく、家に残っていた母と私、弟の三人に

「新大久保の方へ先に逃げろ。後から行く。」と言い残して、再び炎の中を何処かへ消えて行ってしまった。

住みなれた家と別れた三人は、真赤な町の中、火の粉をよけて逃げまわった。新大久保の強制疎開でこわされた空地の物陰に身を寄せ合って火から体を守る。「生きた心地がしない」という言葉はこのことか。その時間の長かったこと。不意に後から、

「此処にいたのか。良かった。」と父の声。その時の嬉しさは、筆舌に尽くしがたい。ようやく空が白みはじめ、火も治ったので、周囲を見まわすと全部焼野原。新宿駅、大久保駅、新大久保駅のホームが高い所で無惨な姿をさらしている。

ガレキの道を注意しながら歩いて家に戻ると無論丸焼け、避難していた防空壕には焼夷弾のカラが突きさゝっていた。もし父の判断が後少し遅かったら、学童疎開をしている弟を除き、家族四人は焼け死んでいたことゝ思われ寒気がしたものだ。無論今日私がこの世に居られるのは、運が良かったとしか言いようがないのである。

焼け跡に立ちすくんだ父は弟に

「中野の借家が一軒空いているから見て来るように。」と言った。やがて帰ってきた弟は

「此処から中野まで全部焼けている。勿論借家は一軒も無い。」と言う。その時の父のショックはどんなに大きかったことか。大森に持っていたアパートは強制疎開でこわされ、自宅も借家も失ない土地だけになってしまったのだから。

取り敢えず弟と協力して庭に焼けたトタンの小屋を作り雨風を凌ぐことにした。糸を引くようなおにぎりが配られ、お腹ぺこぺこだった私は、とても嬉しかった。今考えると腐っていたと思われる。

やがて叔母が豊島区にアパートを見つけてくれ、何とか畳の上に寝られるようになった。でも食糧が無い、新宿の焼け跡に野菜を植え、電車もバスも走れないガレキの道を往復二時間かけてリュックを背に歩く。途中で出逢った真黒焦げの遺体は、引取り手も無いのか長い間無惨な姿を横たえていた。

三月に女学校は四、五年一緒に卒業させられた。多分一刻も早くお国の為に働かせようという国策だったのだろう。上級学校（現大学）に進学した私は、入学式をしただけで自宅待機、やがて来た通知は、現在行楽地ナンバーワンの長野県への動員だった。ところが戦災で丸裸の私は、布団も衣類も無い。お金があっても売っていないのだ。已む得ず母の実家（岐阜）

で用意して貰い、中央線、小海線を乗りついで北中込に到着。津上製作所の寮に入った私達を迎えてくれたのは、畳の上を跳びはねる蚤だった。昼間は自分達の食糧確保の為の農作業、主に馬鈴薯掘りである。夜、疲れて布団に入れば蚤の襲撃、かゆくて眠れるものではない。朝になって見るとシーツは蚤に食われた血で、点々としみが着いていた。

少ない馬鈴薯や大豆の入ったご飯では、お腹が空いてたまらず近所の農家でトマトでも分けて貰おうと何人かで出掛ける。何軒も頭を下げて、ようやく胡瓜を手に入れた。寮の食堂へ塩を貰いに行くと一喝され泣く泣く帰ってこっそり味の無い胡瓜をかじってお腹の足しにした。

昭和二十年八月十五日、終戦を知った時の乙女達、どんなに嬉しかったことか。

「これで家に帰れる。」と、歓声をあげて喜んだ。

ところが帰宅した東京の暮らしは、決して楽しいものではなかった。物資の不足は解決するどころか、インフレを引き起こしたのである。駅の周辺には闇市が立ち並び、食糧や古着を配給より高い値段で売っている、お米の配給も名ばかり。代わりに大豆や甘藷が来た。生きる為には、芋のつるから雑草まで食べなければならなかった。警察の目を逃れたかつぎ屋が時々法外な値段でお米を売りに来る。インフレを乗り切る為、土地の一部を手放した父が高い食糧を買ってくれたお陰でどうにか生きることが出来たのである。

お嬢様育ちで女中を使い、お勝手に立つ姿など見たことも無かった母は、焼け跡へ行き真黒になって薪を集めて来た。その無理がたたったのであろう。昼間元気だった母が夕方、気分が悪いと寝込んでしまった。良薬のない時代のこと、医師は、「大分心臓が弱っている。大事にして下さい。」と言うしか手の施しようが無かったのである。翌朝父の代理で出掛けた私は、母が心配でたまらず闇市で高い卵を二個求めて帰宅した。然し時既に遅く母の顔には白布がかかって、父や弟がしょんぼりしているのだった。

一応親族が集まり叔母達が、煮物など持って来てくれて質素なお葬式が営まれた。さて出棺となったが霊柩車ではなくリヤカーが迎えに来たのである。霊柩車は焼けて数が少なく間に合わなかったのだ。親族はリヤカーを引き歩いて落合の火葬場まで行って別れを告げたのである。

折角平和な時代が来たというのに、物資の不足は相変わらず続き、母を亡くした私には、辛い残酷な日々がやって来た。疎開から帰った弟はまだ小学校の二年生。転校手続きやら食事の世話、洋服を手造りで着せなければならず本当に忙しい毎日を過ごした。

財産を取り上げられた父は、生活の為に残った土地の一部を売り、中学、高校の教師をして私達三人兄弟の教育をしてくれた。

戦後の教育は始まったが、ノート一冊手に入らない。悪い藁半紙を買って綴り、手造りでノートを作った。お金があっても物が無くてはどうにもならないのである。

昭和二十五年、結婚することになったが、まだ衣料切符でしか生地が買えない。叔母が古い布団を作り直してくれたり、衣装をかしてくれたりして、やっと式を挙げることが出来たものである。

何とか普通に買い物が出来るようになったのは二十六年頃だったような気がする。

私の青春は、戦争によって苦しみの連続であった。楽しい筈の修学旅行や遠足など全然無し。只、体を鍛える為一日四十キロ位度々歩かされた。若く食べ盛りなのに配給による少量のお米、大豆で我慢しなければならない。

今考えてみるとよく生きてこられたと思う。

現代の若い方々は、素適なファッションにブランド物のバックを持ち、しゃれた靴をはいて、美味しい食事をし、海外旅行に出掛けられる。羨ましい限りである。でも私たち世代の苦しかった生活を少しでも理解して頂き、平和を守って下さる事を希望している。

もし、これから四十数年若返ることが出来たら、楽しい青春を送りたいと思う今日この頃である。

